

中国の古典比喩理論

——日本と西洋との比較を通して——

楊麗雅

はじめに

中国では比喩についての論説が最も早く現れるのが春秋戦国時代である。いわゆる百家争鳴のこの時代では、比喩は自己の主張を宣伝し、論敵を倒す武器としてよく用いられていた。一方古代ギリシャでも初期の比喩論は演説、弁論などにおける比喩の役割を重視していた。したがって、中国と西洋の古典比喩論は同じく弁論術との関連の上で出発している。しかし、この時期の中国の比喩論はたいてい断片的なものであり、しかも主として口語を対象とし、論説における比喩の働きに関心が限られていた。漢の時代になってから、比喩は詩歌の表現手法の一つとして注目され、詩歌における比喩の働きについて言及されるようになった。しかし、本格的な比喩論は、梁の時代の劉勰（約465～約532）から始まる。

本論は、劉勰と陳騏の比喩論をとりあげながら、文学論における比喩論と、修辞学における比喩論という二つの角度から、日本と西洋との比較を通して、中国の古典比喩論をとらえるものである。

文学論における比喩論

1. 劉勰の比興論

ここでは、中国の比喩理論の萌芽である劉勰の比興論の特色及び中国の比喩

理論への貢献について論じる⁽¹⁾。陳騏は『文心雕龍』の中で『詩経』の〈六義〉⁽²⁾の理念に基づきながら、〈比興〉の文体的特徴を指摘し、詩歌における〈比興〉の役割を詳細に論述した。

〈比興〉の共通な特色について、劉勰は次のように述べている。

詩人比興，触物圓覽。物雖胡越，合則肝胆。擬容取心，断辞必敢。

（詩人の比興は、物に触れ、それを綿密に観察するのを基礎とする。比する事物と比される事物が、胡の国と越の国のように遠く離れていても、比喩の中で肝臓と胆嚢のように密接に結び付いている。物のイメージや姿を借りて、その心を現す。文辞を果敢に駆使すべきである⁽³⁾。）

すなわち、〈比興〉は、喩をなすとき、二つ或いはそれ以上のそれぞれ異なる事物が同時に存在し、それらを綿密に観察することによって、類似点或いは共通点を探し出すことが大事である。

〈比興〉が異なる事物の間の類似点をもとにする手法であるという劉勰の比興説は、今日の比喩の定義に共通している。ここでは、劉勰の挙げた〈比〉と〈興〉の例文を見ながら、その比興論の特色を探る。

〈比〉については次のような例句が挙げられている。

① 有匪君子，

如金如錫，

如圭如璧。

（匪たる君子は，

金の如く錫の如く，

圭の如く璧の如く。

『詩経・淇奥』)

② 繁縟繹，絡范蔡之説也。

（繁縟絡繹たるは范・蔡の説なり

馬融「長笛賦」)

①は、金や圭などをもって美德にたとえ、②は簫の豊かに絶えぬ音声を、范睢と蔡繹の弁説に喩している。劉勰の挙げた〈比〉の例はいずれも①のように、

「如く」という比喩詞がつくものか、あるいは②のように、比較の根拠を明確に示したものであり、現代でいう比喩にあたる表現である。

劉勰はさらに〈比〉の分類をも行なっている。それによると、二種類の〈比〉がある。その一は「比義」とされ、ある具体的な事物をもって抽象的な意味を表すものである。その二は「比類」で、ある具体的な事物をもって他の具体物を描写する類である。例えば、①のように、「金」や「錫」を君子の明德に喩えるのが、「比義」の類であり、雪をもって麻の衣の白さを喩えるのが「比類」である。

〈興〉としては次の例がある。

③ 關々雎鳩，在河之洲；

窈窕淑女，君子好逑。

（關々たる雎鳩は、河の洲に在る。

窈窕たる淑女は、君子の好逑。

『詩経・關雎』

文章の上では、「雎鳩」と「淑女」との関連を示す言葉がないゆえ、一見無関係のように見えるが、劉勰の解釈によると、これは后妃の徳を、雌雄の別の正しい雎鳩にたとえている〈興〉である。すなわち、両者の関連には比喩的要素が入っている。

〈比〉と〈興〉の相違点について、劉勰は第一に、「比顯而興隱」という点を指摘した。すなわち、〈比〉では本体と喩体⁽⁴⁾の関連が顕在し、〈興〉では隠しているということである。例えば、劉勰の挙げた〈比〉の例文では、比喩詞あるいは、比喩の比較根拠が明白であるのに対して、〈興〉では、本体と喩体との関連性は明示されていない。第二の相違点は、「〈比〉とは附であり、〈興〉とは起である」という。これについては、劉勰はさらに次のように論じている。「理を物に附して表す〈比〉は、類似の物事を用いて説明するのに対して、情を起す〈興〉は、〈興〉の文とその後に続く本体の文との微妙な関係の中で主観を働かせて、その意味をおしはかる。情を起すところに、〈興〉の体が成り立ち、理を物事に附するところに〈比〉の例が生まれる」。例えば、〈比〉

では、人間の弁説の洵々と続くことを簫の音声の豊かに絶えぬことにたとえる例では、簫は人間の弁説を形容するために付加されたものであり、本体と喩体は一つの文の中にあり、両者の類似は明らかであり、知的である。一方、〈興〉の場合は、「睢鳩」の描写は詩のはじめにあり、それ自体は完成した意味をもつ文である。「睢鳩」はその習性によって貞潔を象徴するものとなっている。この象徴的な意味は、興の文とその後に続く本体の文を結びつける。すなわち、〈比〉と〈興〉は、比喻の機能を果たすとき、〈比〉は、喩体が本体に完全に依附するのに対して、〈興〉の文は、単にその次にくる文を説明するだけでなく、それ自体は自然風景を呈示しながら、後の人事的な材料と調和し、感覚的な情緒をひきおこす。このような〈興〉の特色は、今日の比喻の解釈において、なお生かすべきものである。

以上は〈比興〉の文体上の特色及び表現効果に関する劉勰の論述の分析である。しかし、劉勰は、〈比興〉の表現効果より、社会における〈比興〉の役割を重要視している。例えば、〈比〉の中の「比類」は、事物の外形の類似による比喻であり、純粋な描写的色彩が強く、中には装飾的な比喻表現と思われるものが多く含まれている。そのため、「比義」のほうが「比類」より評価される。〈興〉では、自然景物をもって、ある道徳的な観念或いは世界観を暗示するものが多い。それゆえ、劉勰は〈興〉を重視する。劉勰はさらに漢代の〈比〉は、中に純粋な描写的な色彩をもつ表現が多いことを挙げ、それが『詩経』の〈比〉と〈興〉に劣ると評している。これは〈詩言志〉⁽⁵⁾の理念を基準とした価値評価である。すなわち、劉勰は「人の耳目を驚かせる」⁽⁶⁾巧みな比喻より、諷諫或いは教化を目的とする比喻を評価しているのである。

2. 〈興〉と日本の表現形式

日本の和歌の中には〈興〉に類似したものとして序詞がある。鈴木日出男氏はその「万葉集のレトリック」の中で、古代の歌の序詞の修辞法の特徴について、次の例を挙げて論じている。

娘子らが袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ

思ひきわれは（4・501）

この歌についての氏の解釈は次の通りである。「人を久しく思いつづけてきたという心と、神さびた山の社の景との間には、もともと必然的な関係があるわけでもない。というよりも、両者は次元の異なる位相にある。にもかかわらず、このように心と景が一首の歌として構成されてみると、景は単なる実在の風景にとどまらず、心の反映された一種の心象風景を形成していることになる」という。したがって、歌の序詞の物象は、「単なる比喩としての機能に終始するのではなく、共同感情の象徴的な記号としても機能している」ことになる⁽⁷⁾。

以上に述べてきたことを概観すると、中国の〈興〉と日本の序詞のような特殊な喩は、その対象自体、象徴的な意味をもち、さらに比喩的機能のもとで、後の文と結びつけられる。したがって、その対象の呈示する景は、ふつうの比喩のように、後の文の人事的な材料を説明するためにのみ持ち込まれたものでなく、両者はそれぞれ独立した機能をもつと同時に、調和した融合体でもある。ここで注目すべきなのは、〈興〉が日本文学の表現形式に取り入れられたとき、劉勰の強調した〈興〉の諷諫作用、教化作用より、むしろその附情作用が継承され、発展したことである。

夏目漱石は〈興〉のような表現に「調和法」⁽⁸⁾という名称を与え、その特色を次のように指摘している。

かの漢學者の詩文評に情景兼至などあるも、畢竟人事的材料對感覺的材料の調和上に成功せるを賞するに過ぎず。由來我邦人は先天的に自然を愛する傾あるがごとく、古より詩歌美文にして未だ嘗て此調和法を度外視したることあるなし。人事の背景には必ず自然あり、自然の前景には必ず人事あるを常とす。泰西の人烟霞の癖に耽る事意外に少なく従つて彼等の作物中此種の調和を必然の要求と認めざるが如き觀あるは、東洋人にとつて注目すべき現象と云はざるべからず⁽⁹⁾（下線は筆者による）。

調和法として漱石は次の例を挙げている。

此程は三人一所に有りつるだに。さも怖ろしく。すさまじき。荒磯島にた

どひとり。離れて海士のすて草の波のもくづのよるべもなくであられんものか浅ましや……。 (謡曲『俊寛』)

この表現に対しては、二つの解釈が可能である。一つは、人間の運命を「海士のすて草」、つまり海士が捨てた海藻の屑にたとえている、いわゆる抽象的な事物を具体化、形象化した比喩としての解である。もう一つの読み方は、漱石のいう調和法である。つまり、この表現では、「極めて切實なる自然の風景を點綴して數奇の運命を詩化する點に於て、一種特有の調和」を保っているのである⁽¹⁰⁾。調和法としては、「海士のすて草」は、単に人間の運命を解釈するためにのみ存在する価値があるだけでなく、それ自身が一つの自然風景として読み手に訴える力をもっている。漱石は調和法を比喩としていないが、その挙げた例はほとんど比喩の範疇に入るものである。したがって、漱石の調和法に対する解釈は、比喩表現の解釈に新しい境地を開くことになる。

中国の古典文学論における比喩論の多くは劉勰の比興論に示されているように、比喩の附情作用などの表現効果より、その諷諫作用、教化作用など、詩人の「志を言する」機能を重視する。これに対して、日本の文学論における比喩論は、比喩の附情作用を大きく取り上げる。この傾向は日本の修辞学における比喩論にも反映している。例えば、日本の近代修辞学を代表する島村抱月は比喩を次のように定義している。

譬喩法とは、想念が斯くの如き發展をなすにあたり、必要なる限り同一情趣の下に新想念を附加し來たるの謂にして、之れによりて原想念の情を豊富にし、種々の面より之れを結體せしめんとするの修辭法なり⁽¹¹⁾。

抱月の定義で注目すべき点は、とりわけ、「原想念の情を豊富」にする比喩の特色を明記していることである。

一方現代では、比喩の附情作用を軸とする比喩論に対する異論が多く唱えられるようになった。例えば、岡崎義恵は日本の序詞の物心の融和の特色について次のように論じている。「日本的な物心の融和は、やはり理知的、自覚的でなく、情調的、無自覚的であるといわなければならないもので、一つの美的態度ではあるが、必ずしも世界觀的思想であるとはいいい難い」⁽¹²⁾。岡崎義恵はさ

らに、比喩が「知的要求から起こるものである」ことを強調し、「優美で、親近な生活圏内の二、三の物象を探って、叙述を飾るというくらいの程度でなければ、日本文芸は譬喩的表現法に興味を持ちかねるのである」⁽¹³⁾と批判する。岡崎の比喩論は現代の比喩論の傾向を示している。すなわち、比喩の附情作用（考え方によっては修飾作用とも解釈される）を大きく取り上げた比喩論に反発して、古代比喩論を復活させ、比喩の思想性、実用性を考慮すべきことを強調する。しかし、日本の比喩研究者の唱えている古代比喩論はほとんど西洋古代のメタファー論を意味する⁽¹⁴⁾。これまでの分析で示してきたように、日本の比喩理論を考えると、中国の古典比喩理論が無視できない存在である。

修辞学における比喩論

1. 陳騏の比喩分類法の特徴

現代中国の修辞学における比喩の分類及びその名称は宋の時代の陳騏（1128～1203）の比喩分類法を原型とする。陳騏はその『文則』（約1170）の中で比喩を直喩、隱喩、類喩、詰喩、対喩、博喩、簡喩、詳喩、引喩、虚喩と細かく十種類に分けている⁽¹⁵⁾。

陳騏の分類と現代のそれとの異同は次の表に示されている。

現 代	陳 騏
直 喩	対喩, 類喩, 詳喩, 直喩
隱 喩	簡 喩
借 喩	隱 喩

まず陳騏の挙げた具体例を見よう。

(1) 直 喩

① 凄然似秋（その悲哀は秋のごとし。『莊子』）

〈ごとし〉のような比喩詞を明示していることが分類の基準となっている。

(2) 詳 喩

- ② 夫耀蟬者，務在乎明其火，振其樹而已。火不明，振其樹無益也。今人主有能明其德，則天下之，若蟬之歸明火也。

（夫れ蟬を耀らす者は，務其の火を明らかにして，其の樹を振るふに在るのみ。火明かならざれば，其の樹を振るふとも益無きなり。今人主能く其の徳を明きらかにするもの有らば，則ち天下之に歸すること，蟬の明火に歸するが若きなり。『荀子・致士』）

〈若し〉という比喩詞がついているため，現代では，直喩に属するものである。陳騷はこれを詳喩と呼び，直喩と区別した。それはこの種の比喩が，「須假多辞，然後意顯」（「まず多くの解釈の辞句があって，はじめてその喩意が顯かとなる」）という特徴をもっているからである。

陳騷のこの分類の基準は，比喩の言語的構造によるのではなく，その表現の意味に着目しているのである。

(3) 類 喩

- ③ 天子如堂，羣臣如陛，衆庶如地

（天子は堂の如し，羣臣は段階の如し，衆庶は地面の如し。賈誼『新書』）
構造からとらえれば，これは三つの直喩によって組み立てられている。しかし，この表現は，〈堂〉と〈段階〉，〈地面〉という三者の相互関連を軸としている。これを独立とした三つの直喩として解釈すると，その意味が十分に理解できなくなる。

(4) 対 喩

- ④ 流丸止於甌臯，流言止於智者

（流丸は甌臯に止まり，流言は智者に止まる。『荀子・大略』）

この種の比喩の特色は，まさに〈対喩〉という名称が示しているように，本体と喩体が，対句となっている点にある。現代では，これを直喩としている。

(5) 簡 喩

- ⑤ 名，徳之輿也。（名は徳の輿なり。『左傳・襄公二十四年』）

陳騷は，この種の比喩に，「その文章は略されているところがあるが，その意味は明らかである」というように解釈している。このような「AはBである」

という文型は、現代の隠喩の基本形である。

(6) 隠 喩

- ⑥ 雖蝸譖，焉避之？（木食虫が、木の内側からむしばむことはどうして避けられるのであろうか。『国語・晋一』）

この比喩の本体は、君子の側近が讒言をもって君子を陥れることである。この本体は、比喩の言表に示されていない、完全に喩体の中に隠されている。陳騏はこの種の比喩を「文章は晦渋であるといえども、その意味は究明できる」と評している。したがって、この分類においても、陳騏は、比喩の意味伝達に力点をおいている。現代ではこの種の比喩がその本体が明示されていないことをもって、借喩と名付けられる。

陳騏の分類と、現代のそれを比べてみると、現代の分類は、比喩のもつ言語的構造のみ分類の基準としている。これに対して陳騏は、比喩のもつ言語構造にも注目しながら、比喩の意味伝達を分類の軸としている。陳騏の分類は、現代の分類ほど単純明快なものではない。しかし、比喩のもつ様々な様相を的確に把握するのにより示唆的である。

例えば、③の例文を、現代では直喩と見なすのに対し、陳騏は類喩と名付けている。この種の比喩の特徴は、直喩のように、本体と喩体の関係のみによるのではなく、三つの喩体の相互関連に焦点をおいている点にある。したがって、この三つの直喩の構造をもつ表現が一つの有機体をなしており、それらを分離すると、この比喩のもつ意味と効果はなくなってしまう。

④においても、現代では直喩に属するものであるが、陳騏はこれに対喩という名称を与えている。現代の解釈にもとづいてこの種の比喩に、「のような」などの比喩詞を付け加えるとすれば、対句という、この種の比喩の構造的特色は損なわれる。陳騏はこのような比喩をとくに対喩という名称で呼んだ。それはその独特な構造美を注視したためであろう。

陳騏の比喩理論と、劉勰のそれとを比較すると、劉勰は、主として比喩の本質、働き及び表現効果を説いたのに対し、陳騏は、比喩の意味伝達に論の力点をおいている。劉勰は『詩経』の詩及び賦のような表現を対象として、比詩

喩の、詩人の「志」を表する機能、イメージを喚起する働き及び、新鮮さ、驚きなどの情緒をかもし出す表現効果などを論述した。一方、陳騏は『論語』や『左氏傳』などのような散文から比喩例をとりあげ、意味伝達を中心として、比喩の分類を行ったのである。劉勰と陳騏は、比喩をとらえる角度が異なっているが、両者とも、中国の比喩理論への貢献が大きい。

2. 中国比喩論と西洋メタファー論との違い

中国の比喩理論の基礎を築いた劉勰の比興論と陳騏の分類法の注目すべき共通な特徴は、言述のレベルで比喩を考えることである。これは西洋のメタファー論との大きな違いである。

西洋のメタファーの概念はアリストテレスの次の定義から出発している。

言葉の転用すなわち比喩とは、或る事象に対して、本来は別の事象を指示する言葉を転用することであり、その様相には以下の四つの型がある。

(1)類全体を示す言葉が、その類に下属する一つの種に転用される場合、(2)種を示す言葉が、逆に、類全体に転用される場合、(3)一つの種を示す言葉が、類を同じくする別の種に転用される場合、(4)類似関係に従って転用される場合、この四つである⁽¹⁷⁾。

アリストテレスがメタファーに与えたこの定義には、今日のいうメタファーだけでなく、換喩 (metonymy) と提喩 (synecdoche) の概念もふくまれている。中国においては換喩と提喩を、〈借代〉という名称で呼び、比喩として扱わないことが多い。これは〈借代〉が比喩のように類似点によって成り立っていないからである。中国の比喩の概念は本体と喩体の類似を根拠とする点で、現代の西洋でいうメタファーに最も近い。日本のいう比喩は提喩、換喩、活喩などをも含む点で、西洋の figures of speech に近い。

アリストテレスはまたその『詩学』の中で、メタファーを外来語、修飾語などと同じ範疇のものとした。すなわち名詞のレベルからメタファーをとらえ、一種の名詞の転用として考えたのである。アリストテレスが比喩に与えた定義のもつ意義は、ポール・リクールによれば、「隠喩を言述にではなく、語や名

詞に結びつけたことによって、以後詩学や修辞学の歴史を数世紀にわたって方向づけることになる⁽¹⁸⁾ということである。このようなアリストテレスの古典的なメタファー論に対し、近代のメタファー論の基礎を立てたとされる I. A. リチャーズ (Richards) の『新修辞学原理』では、メタファーの意味作用の場としての言述の重要性がもち出されていた。リチャーズの理論を継承し、発展させた マックス・ブラック (Max Black) は、メタファーの分析用語として「焦点」(focus)と「枠組」(frame)を提示し、文脈の中でメタファーのもつ意味をとらえることを強調した。しかし、ブラックのメタファー論の中でも「語」は依然として「焦点」となっている。

日本の近代修辞学における比喩の分類は、西洋の figures of speech によるところが大きい。一方、中国の比喩論とも深い関連をもつ。例えば、島村抱月は隠喩を「単語より成れるものと複雑なる」ものとの二種類に分けている。『法を破る』『志を立つ』等の類はそれが単純なるものにして一派の修辞家が轉義と稱するものに屬す。『國運既に傾きぬ一木の能く支ふる所ならんや』などいへるは、二以上の喩を重ねて一章の喩を全うせるなり」と説明している。島村抱月のいう「単純なるもの」の類の隠喩はまさにメタファーにあたるものであり、一方、二以上の喩を重ねた「複雑なるもの」としてあげた例を解釈すると、「國運」はなにかの建築物に喩えられ、「一木」は人間などに喩えられているが、しかし、「傾き」や「支ふる」などの語と結びつかなければ、「國運」を何かの建築物にたとえること自体がまったく意味をなさない。中国ではこのような表現を一つの有機体、すなわち全体を一つの隠喩として考える。島村抱月はここで明らかに西洋のメタファーの概念を念頭におきながらも、「一章の喩を全うせるなり」という解釈でも示しているように、「複雑なる」比喩を同時に一つの有機体としてとらえ、「轉義」としてのメタファーと区別している⁽¹⁹⁾。

中国と日本の表現形式のつながりも比喩論に反映している。たとえば、「蟻は甘きに集まり、人は新しきに集まる」⁽²⁰⁾のような比喩表現は、『文則』の中で「対喩」と名づけられているが、現代中国と日本では、これをともに直喩の一種として考える。この種の比喩は、まさに「対喩」という中国の古典比喩論の

名称でも示されているように、本体と喩体が対句となっていることを特色とする。

結 び

劉勰はその比喩理論の中で内容と形式の統一を主張し、比喩の附情作用を取り上げながら、諷諫、教化作用という比喩が社会に果たすべき働きについて強調した。劉勰の比喩理論は、文学の文脈の中で比喩論を展開しているため、現代の比喩理論より活気のあるものである。陳騏の分類においては、比喩の言語構造とその意味伝達とを関連づけているため、現代の分類と比べ、比喩の意味伝達の解釈においてはより示唆的である。

劉勰と陳騏に代表される中国の古代の比喩理論は、弁論術、詩歌論及び経典解釈などと深く結び付いていた。そのゆえ、比喩のもつ様々な働きは非常に重要視されていた。現代に近づくにつれて、比喩とほかの学問とのつながりがだんだん薄れてきたため、比喩を単なる言語的修飾と考えたり、修辞学者の分類の対象としてのみ扱う傾向が強くなった。比喩理論に新しい血液を注ぎ、活気づけるためには、中国の古典比喩理論を新たに掘り下げ、そのもつ意義を再認識することが必要であろう。

《注》

- (1) 〈比〉と〈興〉の概念と今日の比喩との関連について、中国では様々な説があり、一定していないが、主に〈興〉が比喩であるかどうか議論が集中している。例えば、李金荅氏は、「六義」のなかの〈比〉のみが現代の比喩であると考えているのに対し、張志公氏、周舸岷氏の「〈比・興〉について」では、〈興〉を一種の〈比〉と見なしている。また〈比〉は現代のいう直喩であり、〈興〉は隠喩であるという説もある。たとえば、王元化は劉勰の比興編における〈比〉を直喩、〈興〉を隠喩と理解している（王元化、188頁）。日本でも同じ現象がみられるが、〈比〉を現代の直喩、〈興〉を隠喩とする説が多い。例えば、辰巳正明氏は〈比〉は、直喩、〈興〉は隠喩であると解釈し、膳宏氏は『文心雕龍』の「比興

編」を「直喩と隱喩」と訳している（『世界古典文学全集』第25巻『文心雕龍』目次，筑摩書房 昭和13年12月）。

- (2) 〈六義〉は風，雅，頌，賦，比，興を差す。
- (3) 劉勰『文心雕龍』比興第三十六
- (4) 比喩の具体例の分析を行う際に、「本体」「喩体」「比喩詞」という用語を用いる。この三つの用語は比喩の構成要素を表すものとして現代の中国の修辞学上で定着している。「本体」は思想の対象をさし、「喩体」はそれを説明し，性格づけ，あるいは描写するためにもってくるほかの事物である。「比喩詞」は「本体」と「喩体」を関連づける語である。
- (5) 〈詩言志〉は，中国の古典文学における重要な理念の一つであり，詩が詩人の志を表現するものであることを意味する。「志」は詩人の思想，抱負，感情などを差す。
- (6) 注2を参照。
- (7) 鈴木日出男「万葉集のレトリック」（『国文学』昭和61年1月号，76頁）。
- (8) 〈興〉は詩の冒頭にあり，大抵叙景的表現であり，その後続く本体を起こすものである。これに対し，漱石の「調和法」においては，叙景表現は必ずしも本体の前にあるのではない。
- (9) 夏目漱石『文学論』第四編第五章 調和法 306-307頁（本論での引用はすべて岩波書店昭和41年発行の『漱石全集』による）。
- (10) 注9を参照，310頁。
- (11) 島村抱月『新美辞学』第二編 第二章 第六節 208頁。
- (12) 岡崎義恵『日本文芸の様式と展開』表現の融和性 54頁。
- (13) 注12を参照，61頁。
- (14) 西洋の‘simile’と‘metaphor’は，中国と日本でいう「直喩」と「隱喩」にあたる概念であると一般的に考えられている。しかし，実際に中国で言う直喩と隱喩は西洋のそれと異なっているところがある。そこで混乱を避けるため，西洋の二つの基本的な比喩法をシミリーとメタファーと呼んで，中国の直喩と隱喩，借喩と区別する。下の表は，中国と西洋の分類の異同を示したものである。

中 国	直 喩	隱 喩	借 喩	諷 喩
西 洋	シミリー	メタファー	アレゴリー	

- (15) 陳騭『文則』，丙 凡四條
- (16) 現代の比喩の分類は中国の近代修辞学を代表する陳望道の分類による。氏は比喩を直喩，隱喩，借喩と分類している。次の図は，比喩の分類とその構成要素と

の関連を示したものである。

辞格 句 式 成分	直 喩		隠 喩		借 喩
	詳 式	略 式	詳 式	略 式	
正 文 (本体)	現	現	現	現	(隠)
譬喩語詞 (比喩詞)	ように 如き など	対句の 形式 など	である だ の類	(隠)	(隠)
譬 喩 (喩体)	現	現	現	現	現

以下は陳望道の挙げた例文である。

① 直喩の略式：

兵無常勢，水無常形。

(兵には常勢がなく，水には常形がない。『孫子兵法・虚実』)

② 隠喩の詳式：

趙衰，冬日之日也。趙盾，夏日之日也。

(趙衰は冬日の日なり。趙盾は，夏日の日なり。『左傳』文公七年)

③ 借喩：

嗟呼！ 燕雀安知鴻鵠之志哉！

(あゝ，燕雀にはどうして鴻鵠の志がわかろうか。『史記』陳涉世家)

(17) アリストテレス『詩学』第21章

(18) Paul Ricoeur, *La Metaphore Vive* 第一研究 2. 『詩学』と『弁論術』(本論でのこの著書からの引用は久米博氏訳『生きた隠喩』による，11頁)。

(19) 注11を参照，217頁。

(20) 夏目漱石『虞美人草』184頁。

参 考 文 献

アリストテレス『詩学』第21章(今道友信ら訳『アリストテレス全集17』岩波書店 1972.8)

岡崎義恵『日本文芸の様式と展開』二 表現の融和性(宝文館 昭37.12)

島村抱月『新美辞学』第二編 第二章(早稲田大学出版部 明34.5)。

鈴木日出男「万葉集のレトリック」(『國文學』76頁 昭和61年1月号)。

張志公，周舸岷「〈比・興〉について」(『修辞学研究』第一輯 43頁 華東師範大学出版社 1983年1月)

陳 騭『文則』(1170)丙 凡四條(劉彦成訳『文則注釈』書目文献出版 1988.2)

陳 望道『修辞学発凡』第五編（上海教育 1976.7）

夏目漱石『文学論』第四編 第五章（『漱石全集』第九卷 岩波書店 昭41）。

李 金荅「わが国の古代比喩理論」（『修辞学研究』安徽教育 1983）

劉 勰『文心雕龍』比興第三十六（『文心雕龍輯注』上海華書局。日本語訳『世界
古典文学全集』第25巻 筑摩書房 昭13.12）

Max Black, *Models and Metaphors* Cornell Univ. Press, 1962.

I. A. Richards, *The philosophy of Rhetoric* Oxford Univ. Press, 1936.（石橋
幸太郎訳『新修辞学原理』南雲堂 1961年6月）。

Paul Ricoeur, *La Metaphore Vive* Editions du Seuil, 1975. 第一研究2.『詩学』
と『弁論術』（久米博氏訳『生きた隠喩』。岩波書店 1984年8月）。